被服構成における素材に関する研究 I

―― 藤布について ――

豊田幸子

A Study on the Material in the Composition of the Costume (Ist Report)

—about「Fuji Nuno」—

Sachiko TOYODA

はじめに

今日，通信・交通のめざましい発達により世界各国の情報文化が氾濫する中で，衣生活における被服素材にもあらゆるものが取り入れられてきている．しかし被服構成にあたり，素材についての正しい知識により科学的に日本の気候・風土あるいは社会生活に最も適した素材を選択してゆかねばならないと考える．

古くから山村では重要な仕事着の材料とされてきた藤布が，現在でも京都府宮津市世屋地方において老女達によりわずかながら生産されている．

今回は祖先の生活の中で生きつづけた木綿以前の長い歴史と伝統を持つ日本在来織布について研究し，ここで再評価して私達の豊かな将来の衣生活のために発展的に受けつぎたいと考え，藤布の生産地とそれが使用された主な地域，藤布の製法，藤布の用途，以上の点につき文献ならびに京都府宮津市上世屋と愛知県北設楽郡内の2地域における聞きとり調査を行ったので報告する．

1. 調査時期　昭和49年2月～50年1月

2. 藤布の歴史

藤布の歴史は万葉時代に始まると云われるがはっきりとした起源はわからない．しかし

大網公人主，宴に吟ふ歌一首

須磨の海人の塩焼衣の藤衣間遠にしあればいまだ着なれず（万葉集巻3，413[1]）

と歌われ，また古事記の応神天皇の条にも即ち其の母，布遅葛を取りて，一宿の間に，衣褌及襪沓を織り縫ひ，亦弓矢を作りて，其の衣褌等を服せ，其の弓矢を取らしめて，其の嬢子の家に遣はせば，其の衣服及弓矢，悉に藤の花に成りき．（古事記[2]）

と，藤蔓をとって布を織ったという伝説が記録されており，藤布は麻布・かじ布，科布等とともに古くから庶民の生活の中にあった．藤布で作られた衣は藤衣とよばれ，この花の美しさから藤衣といえば詩情を感じ優美さを連想するが，この布は荒妙（あらたえ）の枕詞がしめすとおり太糸の織目のあらい粗布であったため万葉時代にも着なれない人も一部にはあったのであろう．また麻とともに喪服にも使用されたことから喪服の代名詞ともなった．

万葉時代から千数百年後の明治時代までこの荒妙の藤衣を平常の着物に用いていた人々は決

して少なくなかった．我国における衣生活は，奈良朝以来中国の影響をうけて階級によるさまざまな装束が定められた．武家社会に移ってもこれに準じて服制が設けられ，その特殊性は有職故事の学問を生み，後世に伝えられてきた．さらに江戸時代，幕府からの禁令が出されたとはいえその財力により贅をこらした町人の服飾は近世文芸の発達により，風俗画・浮世絵に書き残されてきたのである．一方彼等の財源たる米や農産物を生みだす農民の衣生活は自給自足の政策のもとでせいいっぱいの生活であり，縫直し，つくろわれ，ついには雑巾として消え去るものであったから人々から大きな注意をむけられることもなく過されてきた[3)4)]．また彼等にとって仕事着はあくまで実用のものであり，消耗品であったから，その記録や遺物をたどることは困難なことである．

3. フジの種類

藤布は藤蔓の靱皮繊維を材料として紡ぎ織られたものである．これには，ノダフジ（Wisteria floribunda DC）ヤマフジ（Wisteria brachybotrys Sieb. et Zucc.）が使用され何れも山野に多く自生している．ノダフジは本州から九州・琉球地方一帯に自生する関東型．ヤマフジは関西地方から九州に多く自生し関西型といわれる．（表1，図1）

表1　識　別　表

	茎と蔓	葉	花	生育地
フジ（ノダフジ）	蔓は右巻 一年生蔓は細長にて毛少し	小葉11～19枚，長味あり，巾せまし，幼時多少有毛 後成葉は無毛， 葉質稍薄し，下面緑色	花穂長200～600mm， 花は多く，小形， 苞は披針形， 花季遅し	本州以南九州まで自生す，関東型
ヤマフジ	蔓は左巻 一年生蔓は稍太く伸長度少し 白毛密生す	小葉9～11枚，巾ひろし 成葉下面多毛，葉質稍厚し，下面は毛のため帯白色に見える	花穂長100～200mm， 花は少く，大形，香気あり，紫は濃い，苞は卵形，花季稍早し	関西地方，九州に多し（関東地方になしともいう）関西型

本表は上原敬二氏「樹木大図説」による。

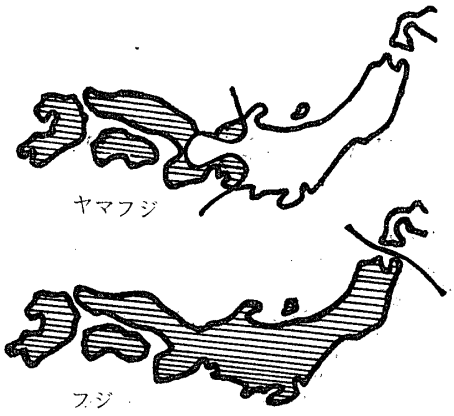

図1　フジの分布
本図は堀田満氏「山の木Ⅱ」による

なお，これらのフジは宮津市世屋地方では，地方名でアカカワとよび[5)]，愛知県北設楽郡津具村ではメメズフジとよばれるものを採集していた．

4. 藤布生産の地域

図2は文献資料[5)～14)]により，藤布の分布図を作成した．古くから藤布の生産が今日まで絶やされることなく残っているのが京都府宮津市世屋地方であり，山形県関川と新潟県栃尾市は昭和46年から伝統織物の復興に熱心な人々の手によって生産が復活し始めた所である．東北，関東，北陸，中部，近畿，関西中国，四国，九州地方において72カ所の地域を知ることが出来た．図1フジの分布と図2藤布の分布とをあわせてみると，九州地方に記録が少なかったが，ここには他の日本在来織布の葛布の生産地があることなどを考えて今後考察をすすめたいと考える．

山間地においてはフジの繊維を利用し織物として自給自足の衣生活を行い，次第に物々交換

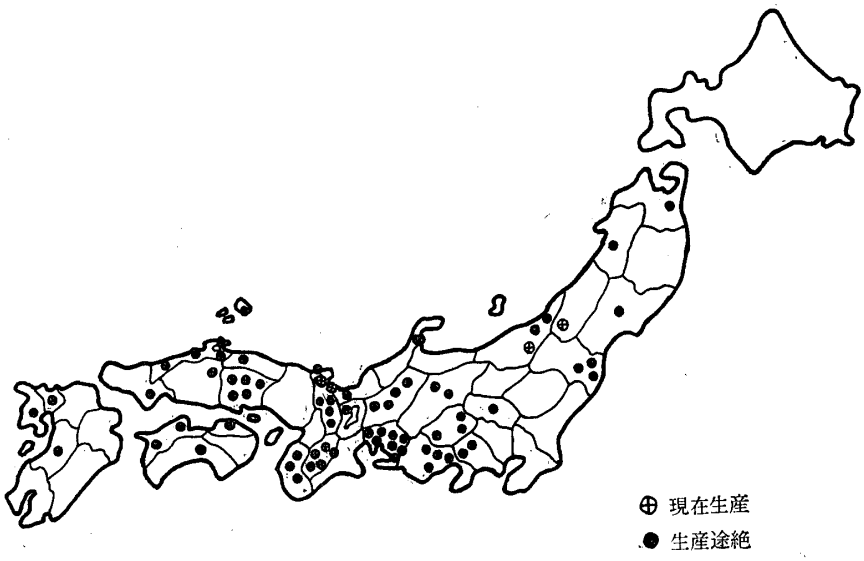

図2　藤布の分布図

により他の地域にも搬出されるようになった．そのため藤布は比較的広範な地域において使用されていたと思われる．

5.　藤布の製作工程

藤布の製作工程についての資料は表2のごとくA．京都府宮津市下世屋，B．京都府宮津市上世屋，C．山形県西田川郡上講武，D．島根県八束郡上講武，E．愛知県北設楽郡津具村，F．神奈川県津久井郡藤野町の6地域の資料を得た。A地域の藤布の製作工程は，藤蔓を3月～9月の時期に採集し，表皮と芯をとりのぞき繊維部分をとり出す．この繊維を7日間陰干しをした後，（図3）3日間水につけ，やわらかくなった繊維を水と木灰を入れ7～8時間煮る，

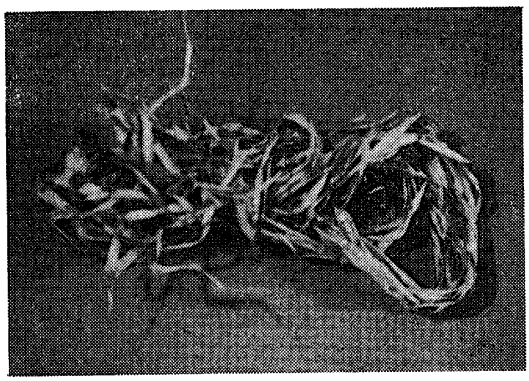

図3　藤の繊維

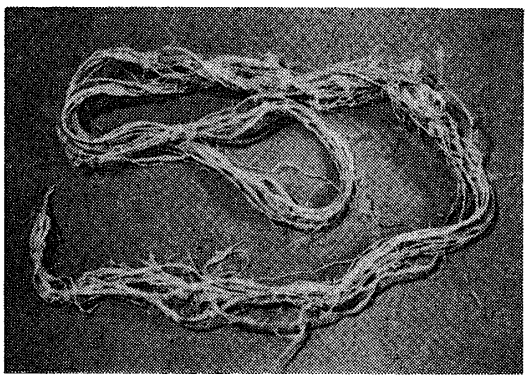

図4　やわらかくなった藤の繊維

釜から揚げた繊維を川に運び，15cm位の竹ばさみでしごきながら清水でよく洗い，繊維を強くしぼり陰干しにする．再び繊維を鉄釜に入れ，水に糠を混ぜて4～5時間煮ると，皮の繊維部分はしだいにほどけやすくなってくる．そしてまた陰干しする．（図4）繊維を爪裂きでバラバラにほぐし，足の指と手で適当な太さに撚りながら糸を績む．（図5）一本の糸状になった繊維は糸車で，（図6）または手で撚糸されて織糸となる．（図7）そこで糸は織場で整経される。整経のあと経糸にだけ，タワシか松葉を使って糊（屑米で作る）を塗布し，織りやすくする．（図8，図9）

他の地域との差をみてみると，順序4においてF地域では繊維を1～2ヵ月間ドブにつけて

表2　藤　布　の　工　程

順序＼地域	A. 京都府宮津市下世屋	B. 京都府宮津市上世屋	C. 山形県西田川郡関川	D. 島根県八束郡上講武	E. 愛知県北設楽郡津具村	F. 神奈川県津久井郡藤野町
1	採集（3月～9月）	採集（6月）	採集（3月～4月）	採集（3月～4月）	採　集	採集（4月～5月）
2	皮はぎ	皮はぎ	皮はぎ	皮はぎ	皮はぎ	皮はぎ
3	乾燥（7日間）	乾　燥	乾　燥	乾　燥	乾　燥	——
4	水浸（3日間）	——	水　浸	水　浸	——	水浸（1～2カ月間）
5	木灰を入れ煮熱（7～8時間）	灰と石灰を入れ煮熱（4時間）	木灰を入れ煮熱	木灰を入れ煮熱	木灰を入れ煮熱	木灰を入れ煮熱
6	水洗（竹ばさみでしごく）	水　洗	水　洗	水　洗	水　洗	水　洗
7	乾　燥	乾　燥	乾　燥	——	乾　燥	乾　燥
8	糠を入れ煮熱（4～5時間）	糠を入れた湯（50℃）につける	糠を入れ煮熱	米のとぎ汁につけもみほぐす	糠と水をかけてもむ	——
9	乾　燥	乾　燥	乾　燥	乾　燥	乾　燥	——
10	藤績み	藤績み	藤績み	藤績み	藤績み	藤績み
11	藤を撚る	藤を撚る	藤を撚る	藤を撚る	藤を撚る	藤を撚る
12	整　経	整　経	整　経	整　経	整　経	整　経
13	織　る	織　る	織　る	織　る	織　る	織　る
14	藤　布	藤　布	藤　布	藤　布	藤　布	藤　布

注）B～F地域にみられる——はA地域における工程の省略である。

図5－1　藤を績む

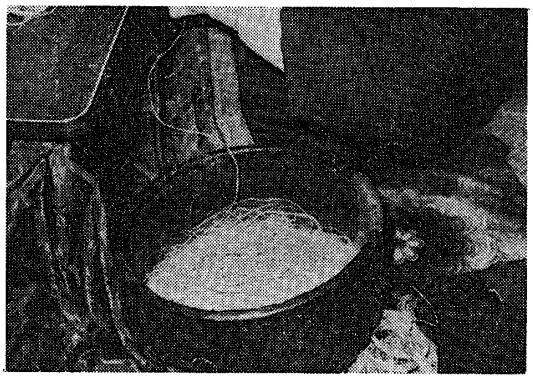

図5－2　藤を績む

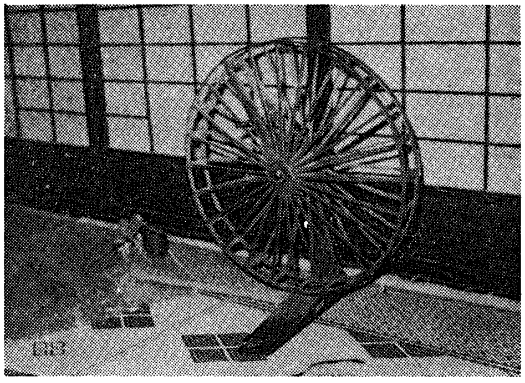

図6　糸車で撚る

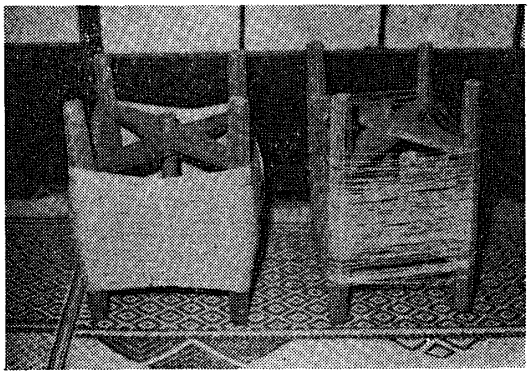

図7　撚りがかけられた藤糸

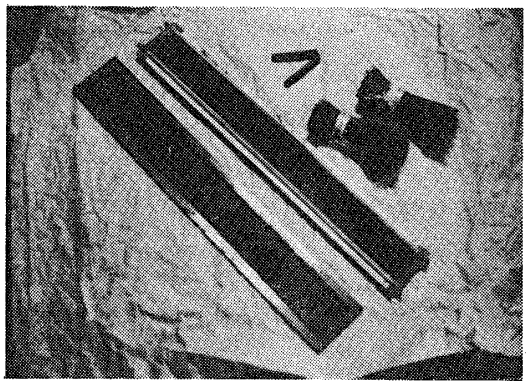

図8　藤糸用のおさ，竹ばさみ，松葉の束

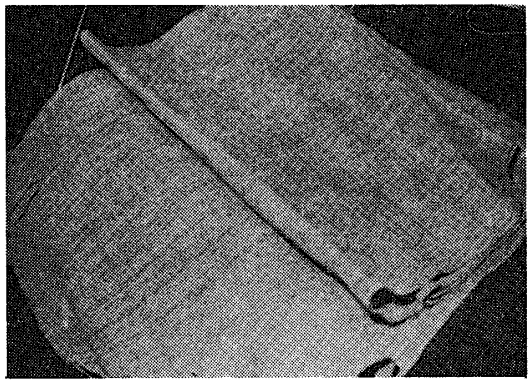

図9　藤　　布

おくという点，順序5においてB地域では石灰を使用する．順序8ではA，C地域が同様の方法で，他の地域はそれぞれ方法がちがっていた．すなわちB地域は糠を入れた50℃の湯に繊維をつけておく．D地域では米のとぎ汁に繊維をつけてもみほぐす．E地域では繊維に糠をまぜながら夏季は水を，冬季は湯をかけながらコロコロと両手でもむ．F地域ではこの工程が省略されている．A～E地域の方法はそれぞれ異っているが，いずれも効果としては繊維をやわらかくし，細かくほぐれやすくさせる為であると考える．

6. 藤布の用途

藤布の用途については文献[5)～14)]ならびに宮津市上世屋，愛知県北設楽郡内の2地域における聞きとり調査の結果表3に示すごとく全国72地域における布類と衣類および生活用具について知ることができた．

表3—1　藤布の生産，使用地域及び用途

	地　　域	布・衣類	生活用具
1	青森県藤坂村（十和田市）	藤布	
2	秋田県	袴・モッペ	
3	山形県西田川郡関川	藤布	
4	宮城県	山袴・山仕事着	米袋・桑入袋
5 6 7	福島県双葉郡上川内 〃　田村郡久保 〃　伊達郡川俣町	野良着・カタビラ・モモヒキ ハバキ	
8	埼玉県	衣料	
9 10	神奈川県足柄上郡山北町中川 〃　津久井郡藤野町	タホ（仕事着）	
11 12 13	新潟県栃尾市 〃　北蒲原郡 〃　上海府（村上市）	藤布・アマ衣（漁業者の着物）	蚊帳
14	石川県鹿島郡能登町	ツーリ・ツーレ・サシコ等の仕事着 フジダコ（経糸，緯糸とも藤） ダコツーリ（経糸は藤，緯糸は麻） カナツーリ（経糸は藤，緯糸は木綿） クサツーリ（経糸は藤，緯糸は古ぎれ）	
15	福井県大飯郡	藤布	
16 17 18	山梨県南巨摩郡西山村奈良田 〃　北都留郡丹羽山村 〃　南都留郡道志村	タホ・フジタホ（経糸藤，緯糸楮） 上衣・タホ襦袢・山袴・モンペ 腰巻・手申・脚絆・ハバキ	のれん・幕（農作業用） 豆腐のこし布
19 20	長野県南安曇郡奈川村 〃　下伊那郡上村遠山	コイノ・雪袴・タチツケ・ハカマ ヤニギ（タバコ畑での仕事着）	メンパ袋
21 22 23 24	静岡県安倍郡清沢村（静岡市） 〃　榛原郡川根町 〃　磐田郡水窪町 〃　周智郡	コギノ（経糸，緯糸とも藤） ザッコ（経糸は藤，緯糸は木綿） ヌノ（経糸は藤，横糸は麻） フジキモノ（仕事着）・タツシケ 水干（西浦田楽に使用）	ふろしき・畳の縁布
25 26 27 28 29 30 31 32	愛知県北設楽郡稲武町 〃　〃　富山村 〃　〃　津具村 〃　〃　設楽町神田 〃　〃　東栄町 〃　南設楽郡作手村菅沼 〃　〃　鳳来町七郷一色 〃　豊川市財賀町	藤布・サツコリ（経糸は藤，緯糸は古ぎれ） 上衣・タツツケ・ハバキ 前掛け（木地師が使用）	蒸し器の敷布 豆腐のこし布 漁網
33 34 35 36	岐阜県養老郡上石津町時山 〃　武儀郡津保谷 〃　〃　板取谷 〃　大野郡白川村	フジコナシ・フジバカマ ヤマバカマ・サルバカマ ハバキ	蒸し器の敷布・弁当袋 お鉢掛・締袋
37	滋賀県高島郡椋川谷	藤布・衣料	

表3—2　藤布の生産，使用地域及び用途

	地域	布・衣類	生活用具
38	京都府宮津市上世屋	藤布・衣料・帯	米袋・畳の縁布
39	〃　〃　下世屋		醤油絞り布・座布団
40	〃　〃　波見		スマブクロ（海女が使用）
41	〃　〃　日置		
42	〃　竹野郡弥栄町		
43	〃　〃　丹後町袖志		
44	〃　船井郡和知町細谷村		
45	奈良県吉野郡大塔村篠原	フジコ・フジコギ・フジキモノ	蚊帳・フジブクロ
46	〃　〃　〃　惣谷	フジコギノ・ハカマ・ハンテン	
47	〃　〃　〃　坂本		
48	〃　〃　十津川村谷垣内		
49	〃　〃　〃　内原		
50	和歌山県有田郡	藤袴・フジノコ（神主が着用する藤布衣）	印籠入れ袋
51	〃　日高郡		豆腐のこし布
52	〃　伊都郡		
53	鳥取県西伯郡大山町	藤布・着物	
54	島根県八束郡鹿島町上講武	肌小・山着・山袴	蒸器の敷布・畳の縁布
55	〃　能義郡	コダナシ・ツヅレ・ハバキ	綟織の漁網
56	〃　簸川郡	脚絆・手甲	
57	〃　邑智郡		
58	〃　隠岐郡		
59	岡山県新見市千屋	山着・野良着・シシベー	藤布袋・豆腐のこし布
60	〃　川上郡備中町平郷字中郷		
61	〃　〃　〃　西油野		
62	〃　真庭郡落合町西河内		
63	〃　阿哲郡上刑部村（大佐町）		
64	広島県比婆郡東城町塩原	コギノ・ヤマワセ	
65	山口県玖珂郡秋中村大字秋掛	山仕事着・前掛け	袋物
66	愛媛県松山市米野々	藤布	
67	〃　西宇和郡三崎町正野		
68	高知県物部川流域	藤太布・山着	豆腐のこし布
69	香川県三豊郡五郷村（大野原町）	仕事着・肩掛け（木材搬出時に使用）	
70	佐賀県	着物	
71	長崎県	藤布	
72	熊本県	着物	

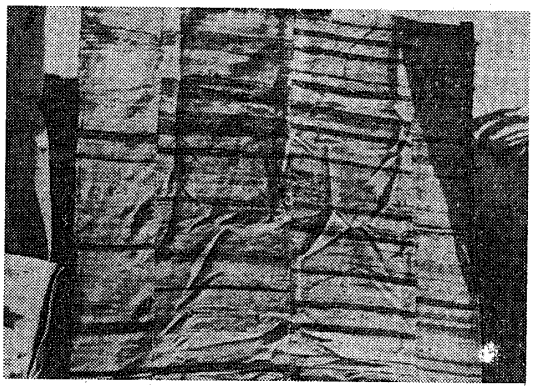

図10　サッコリ

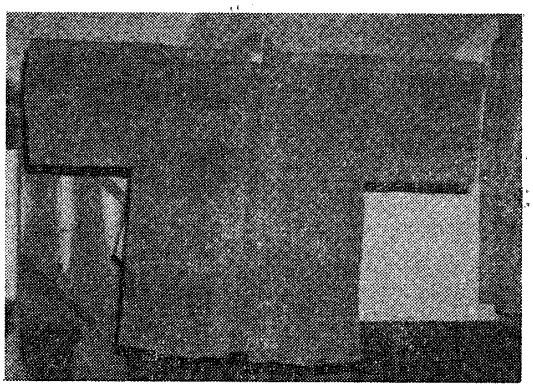

図11　上衣（古橋懐古館蔵）

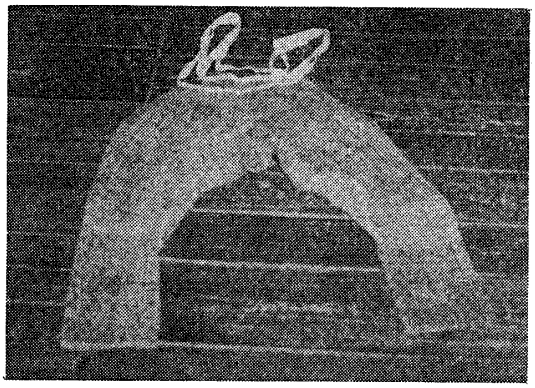

図12　タツツケ（古橋懐古館蔵）

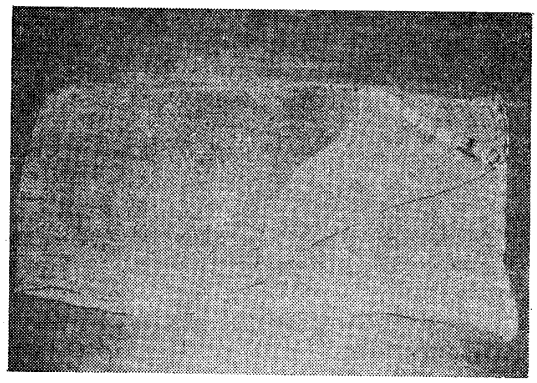

図13　豆腐のこし布（津具村民俗資料館蔵）

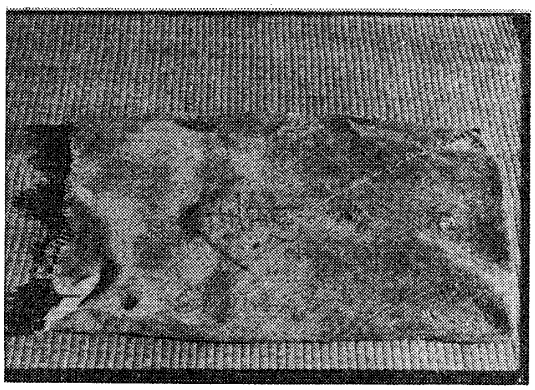

図14　米　袋

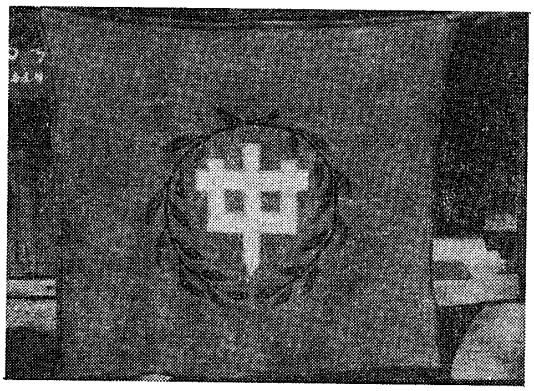

図15　校　旗

図10～15は筆者が調査中に写真撮影の機会に恵まれたもので，図10は愛知県北設楽郡内にあるもので昭和の初めごろまで使用していたというサッコリの掛け布団である．経糸に藤糸が使用されている．図11，12は藤布で作られた上衣とタツツケである．図13は豆腐のこし布である．図14は宮津市上世屋にあった米袋で戦後の物質のない時期に藤布を求めて製作されたものという話であった．図15は宮津市上世屋の日置中学校世屋上分校において昭和48年生徒達の手で藤布の校旗が製作された．村の老人達の指導のもとで藤蔓の採集から，機織りと一貫作業が試みられ，この校旗が出来上った．また同時にこの作業が克明にスライドに記録され貴重な資料となっている．

おわりに

藤布は千年以上もの間伝承され，使用されてきた．この布は非常に丈夫で，夏冬通して着ても10年は着られ，「やぶの中を歩いても棘がたたず，棘の方が折れた」という[10]．

はげしい労働にも洗濯にも耐えうる実用性から仕事着などの衣類に使用されていたが，後世次第に衣類には用いられず，主に米袋，畳の縁布，蒸し器の敷布などの生活用具として実用面に使用されてきている．最近では野趣に富んだ独自の味わいが認められ，帯，袋物，座布団の皮に染色，刺繍などを行い格調高い作品が発表されたりして藤布に対して新らしい角度からこれをながめ，その価値について認識を深めつつある．しかし繊維事情の変化や，織手の老令化などの労力問題の為，衣服や生活用具としての藤布が時代の流れと共に消滅しつつある中で，今日の紡織界の発展にとって大切な因子であったこの民族にとって貴重な資料をいつまでも保持されることを念願するものである．

今回は2地域におけるフィールドワークと文献資料により全国における藤布の概要を把握したにとどまった．今後さらに調査，研究を深め，衣服史的見解にとどまらず，衣生活史，すなわち衣服を着て暮す生活史の意味で衣服そのものの物としての研究の上に，用法，科学性，系統，保健，社会生活の中での意義の変遷流動とその必然性を捉えながら，藤布をさらに深く追求してゆきたいと考える．

終わりに本研究に貴重な資料を提供して下さった夏目一平氏らの皆様に厚く御礼申し上げます．

参考文献

1) 高木市之助他，万葉集一，p. 198 岩波書店（1957）
2) 倉野憲司他，古事記祝詞，p. 259 岩波書店（1958）
3) 鷹司綸子，和洋女子大学紀要，6，p. 33～51（1961）
4) 鷹司綸子，和洋女子大学紀要，7，p. 46～60（1962）
5) 大西マサエ他，同志社女子大学学術研究年報，p219～224（1962）
6) 小林豊子他，日本の衣と食全10巻，明玄書房（1973）
7) 高倉新一郎他，日本の民俗全47巻，第一法規（1971）
8) 柳田国男，柳田国男集，14，p. 18～19，筑摩書房（1969）
9) 瀬川清子，海女記，p. 240，三国書房（1942）
10) 瀬川清子，日本人の衣食住，p. 104～125，河出書房（1964）
11) 瀬川清子，きもの，p. 21～23，未来社（1972）
12) 後藤捷一，日本伝統織物集成，p. 69～235，染色と生活社（1974）
13) 富山弘基他，日本の伝統織物，p. 196～197，徳間書店（1967）
14) 名古屋女子大学生活科学研究所，飛騨川流域の自然と文化，p. 396（1970）